

§3 時間は実在するのか? (その3)

【前回の復習】

マクタガートの論証ステップ

ステップ1: 時間の捉え方には、A系列とB系列の二種類ある。

ステップ2: B系列だけでは、時間をとらえるのに不十分である。

ステップ3: A系列が、時間にとって本質的である

ステップ4: A系列は、矛盾している。

ゴール : 時間は実在しない。

■A系列は矛盾する、の説明

未来である

地震の発生が 現在である

過去である

これは矛盾する。しかし次のように言うと矛盾しない。

未来であった

地震の発生が 現在である

過去になるだろう。

しかし、これはA系列で時間を説明するときに、時間を前提している。そこで、時制の表現をA系列で言い換える必要がある。“Thus our statement comes to this -- that the event in question is present in the present, future in the past, past in the future.”

	未来である	のは、過去である。
地震の発生が	現在である	のは、現在である。
	過去である	のは、未来である。

しかし、それでも次のように言えるので、矛盾する

		のは、過去である。
地震の発生が	現在である	のは、現在である。
		のは、未来である。

		のは、過去である。
地震の発生が	未来である	のは、現在である。
		のは、過去である。

		のは、未来である。
地震の発生が	過去である	のは、現在である。
		のは、過去である。

■A系列の矛盾をB系列で説明できるか?

次のように言えば、矛盾は解消する。

	未来である	のは、3.11 より前である。
地震の発生が	現在である	のは、3.11 においてである。
	過去である	のは、3.11 より後である。

これに対する反論は、B 系列の説明は、A 系列を前提するということであつた。

[前回の授業の後の質問]

質問「なぜ A 系列と B 系列をわけたのか。」

質問「時間をとらえるには、A 系列と B 系列と C 系列で十分なのか」

質問「なぜ、A+B で時間を説明してはだめなのか？」

質問「循環論証でもよいのではないですか」

質問「なぜ A 系列と B 系列をわけたのか。」

McTaggart は、この二つの系列を提示することから、議論を始めており、二つに分ける理由については、特に何ものべていません。もしこの区別を批判するのならば、別の系列が可能であることを示す必要があります。もしこの区別を受け入れるならば、なぜこの二つの系列しかないのか、その根拠を問いたくなります。

(形而上学的な事実についての「なぜ」は原因を問う「なぜ」ではない。なぜなら、そこには因果関係がないからである。それは、「理由」をとう「なぜ」ではない。では、それは「根拠」を問う「なぜ」だろう。このことは、形而上学的な問題では、事実とそれについての記述が区別できないということだろうか)

質問「時間をとらえるには、A 系列と B 系列と C 系列で十分なのか」

McTaggart は、時間をとらえるのにこの 3 つの系列で十分であると述べていませんし、証明していません。この質問への応答は、上の質問に対する答えと似たこととなります。「もし反論があるなら、反例を述べよ。もし賛成するなら、そうなる根拠を考えよ。」

質問「なぜ、A+B で時間を説明してはだめなのか？」

A+B で時間を説明してもよいのだとおもいます。McTaggart は、A+B で取り組んでも、時間の説明は矛盾に陥ると考えます。

「A 系列は、矛盾している。そして、A 系列を拒否することは、B 系列の拒否を含む。」と McTaggart はいいますが、しかし、C 系列には矛盾がないので、それは実在するかもしれないと言います。

質問「循環論証でもよいのではないですか」

<A 系列による説明の矛盾を B 系列で説明できる。しかし、B 系列は A 系列を前提しているのので、それを説明するのに A 系列を使うという循環がある。あるいは、A 系列による説明の矛盾を第二の A 系列によって説明できる。しかし、第二の A 系列による説明の矛盾を第三の A 系列によって行う、これは無限に反復する必要がある。>

このような説明は、A 系列による時間の説明に失敗しているが、しかしそのことは、A 系列の非実在性を証明するものではないのではないかと。>

McTaggart は、循環論証によって説明が失敗したとしても、そのことで概念の実在性が否定されることにはならないと明言しています。しかし、彼は、単に循環論証のために説明が失敗するというだけでなく、そこに矛盾が残る続ける、ということから A 系列は実在しないと結論します。

■系列の代替案

C 系列：恒久的順序関係 (permanence)

A 系列：変化+方向(change and direction)

B 系列：恒久的順序関係＋方向：「x は y より前」「y は x より後」

C 系列と A 系列は、究極的なもので他のものから説明できないものでした。B 系列は、この二つが結合によって、説明されました。

代替案 1：「より前」と「より後」はどちらか一方だけでよいので、B 系列を「より前」の関係だけで済ませる。

代替案 2：彼の議論で言及されていなかった前提は、<C 系列が数直線上に並べられる順序関係である>ことである。「D 系列」を「円環になった恒久的順序関係」と定義しよう。B 系列と D 系列の結合が可能である。このときには、<x が y のより前であっても、一周すると y が x のより前になる>。このとき、「permanent」の意味は変化する。C 系列や B 系列は、ニュートンの絶対時間を想定しているように思われるので、現代の宇宙論は、たとえ D 系列でないとしても、おそらく C 系列とは異なる系列を主張するだろう。

■入江のマクタガート批評

現代の量子力学が扱う時間は、C´ 系列＋A 系列からなる B 系列で説明できるとは思われぬ。つまり、現代科学の時間論という時間の方向性は、A 系列という方向性から説明できるようなものではないと思われる。かりに自然科学の時間を、B´ 系列と呼ぶとすると、それは C´ ＋A ではない。

このとき、B´ 系列は、A 系列を前提しておらず、したがって、A 系列による時間の説明が失敗したとしても、この B´ 系列はその影響を受けない。したがって、マクタガートが、C 系列が実在する可能性を認めたように、私たちはこの B´ 系列が実在する可能性を認めることができる。このとき、自然科学の時間 B´ 系列で、マクタガートが考える「変化」が説明できないとしても、それは自然科学にとって問題ではない。

しかし、過去、現在、未来を生きている自然科学者にとっては、マクタガートが考える「変化」を説明できないことは問題である。自然科学的な時間 B´ 系列が実在するとしても、(マクタガートの議論が正しいとすると)我々が生きる時間は、矛盾をはらんでおり、主観的なものだと考えざるを得ない。

平凡な図式だが、<自然科学的な時間が客観的に実在しており、生きられている時間は主観的なものであり、実在しない>ということになる。(これをひっくり返すには、観念論をとるしかない。)

■ マクタガートの結論：時間の非実在性から、時間の主観性あるいは「見かけの現在」へ

Mctaggart は、時間を非実在的であると考え、時間の前後関係、「過去」「現在」「未来」もまた実在に適用できないと考えた。このような時間的な関係はすべて主観的な事柄であると考えられるという。では、そのような主観的な時間を観察しているの私たちはどこにいるのかといえば、「すべては、見かけの現在(specious present)にある」と彼は主張する。「見かけの現在」とは、現在であるようにみえるけれども、本当は現在ではないものである。

マクタガートは、東洋の哲学と宗教では、時間の非実在性の主張が重要である、という。西洋では、ほとんどの神秘主義では、時間の非実在性が主張されており、哲学では、スピノザ、カント、ヘーゲル、ショーペンハウアが時間の非実在性を主張しているという。スピノザを除く 3 名は、観念論者であり、時間を含めて現実の世界全体の観念性を主張する。マクタガート自身は、自分の時間論は、カントよりもヘーゲルの時間論に近いと述べているが、ヘーゲルの時間論は曖昧であるので、ここではカントの時間論を紹介しておきたい。

■現象としての時間：カントの時間論

・カントは、時間と空間を、実在世界の形式ではなくて、人間の直観の形式であると考えた。人間の感性的な感覚や印象や知覚は、空間と時間の中に与えられる。

・他方、人間の悟性には、思考の形式としての 1 2 種類のカテゴリー（純粋悟性概念）がアプリアリに備わっている。

- 1、量（単一性、数多性、全体性）
- 2、質（実在性、否定性、制限）
- 3、関係（実体と内属、原因性と依存、相互性）

4、様相（可能—不可能、現存在—非存在、必然性—偶然性）

- ・これら<直観の形式>と<カテゴリー>が結合することによって、<経験、認識あるいは判断>が成立する。我々が認識できる対象は、我々の直観に与えられるものだけである。
- ・我々に与えられる現象の総体が「現象界」とよばれ、物自体の世界が「英知界」と呼ばれる。現象界は、アプリアリな直観の形式と悟性のカテゴリーによって構成されたものである。物自体がどうなっているかは、不可知である。この立場は、「二世界説」と呼ばれることがある。
- ・カントは、時間は（「超越論的」な意味では観念的なものだが）「**経験的実在性**」をもつ、というだろう。

付録:論理的決定論(宿命論)か?あるいは、未来の非実在論か?

(通常「決定論」というのは、「論理的決定論」=「宿命論」とはことなります。決定論とは、人間の行為を含めて、すべての事柄が、神によって決定されている(神学的決定論)とか、自然法則によって決定されている(自然因果的決定論)を意味します。決定論とは、何らかの因果関係によって決定しているという立場です。)

(ダントー『物語としての歴史』国文社、第9章 未来と過去より)

- (1) pは必然的に、真または偽である。
- (2) pが真ならば、pが偽であることは不可能である。
- (3) pが偽であることが不可能ならば、pが真でないことは不可能である。
- (4) pが真でないことが不可能ならば、pが真であることは必然的である。
- (5) pが真ならば、pが真であることは必然的である。

同様の論証によって、

- (6) pが偽ならば、pが偽であることは必然的である。

(1)、(5)、(6)から、

- (7) pが真であることは必然的であるか、またはpが偽であることは必然的である。(p. 227)

「論理的決定論の一形態は、アリストテレスによって、『命題論』のなかのきわめて複雑な一節で反駁された。アリストテレスの考えによれば、決定論者の議論は、もしそれが確実であるとすれば、行為の不可能性と人間の思慮の有効性を排除している。」(p.228)

「アリストテレスは、(1)は偽であると主張した。彼の積極的な主張によれば、すべての命題は真か偽のいずれかであるということは必ずしも成立しない。」(p. 229)

「未来についての言明、あるいは個々の事物に関する未来の言明が、アリストテレスにとって唯一(1)の例外をなすのである。」(p.231)

これは、未来については、二値原理が妥当しないということであり、**未来についての非実在論である**。私たちが通常考えている時間には、未来があるので、**未来の非実在論は、「時間」の非実在論である**。